足立税務署長賞

「私の『必要』、誰かの『必要』」

足立区立 青井中学校

三年　三浦　茉尋

「自分の税金は、自分が必要だと思うことにだけ使ってほしい。」もしそう思う人が全員、自分で税金の使い道を決められたら、社会はどうなるだろうか。

私は最初、税金を自分の好きなことに使えるなら、それは良いことだと思った。例えば私なら、学校や図書館などの施設をより充実させたり、道路や橋などの社会基盤を整備したりすることを選ぶだろう。自分が普段利用するものに自分の税金が使われるのなら、使い道も分かりやすく、納得もしやすいからだ。

しかし、税金の使い道について調べたり考えたりしているうちに、私たちの生活には、自分が普段意識していない所にも税金が関わっていることに気づいた。医療や福祉、災害への備えなど、その使い道は私が思っていたよりもずっと多かった。その中でも私は、高齢者福祉や介護について考えてみた。今の私にとって介護はそれほど身近なものではない。そのため、もし本当に自分で税金の使い道を決められるとしたら、学校や道路などの自分が普段利用するものを優先してしまうかもしれない。しかし、高齢者やその家族にとって介護は生活に深く関わるものだ。介護サービスを利用することで、介護を必要とする人だけでなく、その家族の負担を支えることにもつながる。そう考えると、介護は一部の人だけに関係するものではないのかもしれない。

そこで私は、疑問に思った。自分が必要としていないものは本当に社会でも必要ないのだろうか。私は今、介護を必要としていない。しかし、これから年齢を重ねれば、自分や家族が介護を必要とする立場になる可能性もある。また、災害の備えも同じだ。普段は使う機会がなくても、災害が起きたときには多くの人の生活を支えるために必要になる。こうして考えると、「自分が使うもの」と「社会にとって必要なもの」は、必ずしも同じではないのだと思った。もし一人ひとりが自分に必要なものだけを選んだら、自分には必要ないが誰かにとって必要なものが選ばれなくなってしまうかもしれない。

今回、税金について考えてみて、私は「自分が使うかどうか」だけでは使い道を判断できないことに気づいた。社会には、自分とは違う立場の人や、自分にはまだ必要のないものを必要としている人がいる。だからこそ、税金が何に使われているかを知り、その先にどのような人がいるのかまで考えることが大切なのだろう。これからは税金を「ただ払うもの」として捉えるのではなく、「自分も暮らしている社会の仕組みの一つ」として関心を持っていきたい。